石巻専修大学

●「石巻専修大学」ホームページ● https://www.senshu-u.ac.jp/ishinomaki/

石巻専修大学
広報係
〒986-8580
宮城県石巻市
南境新水戸1番地
☎0225-22-7717（直）

本年4月、創立30年を迎えました

「東松島食育アプリ」配信

舛井ゼミがプログラミング

アプリを体験する来場者

アプリケーションの開発とそれを生かした地域活性化に取り組む経営学部の舛井道晴ゼミが宮城県東松島市と共同で製作を進めてきた「東松島食育アプリ」＝写真上はタイトル画面＝が完成した。11月18日からアンドロイド端末での配信がスタートし、iPhone（アイフォーン）端末版は2019年3月配信予定。いずれも無料。

アプリは食事マナーや栄養に関する知識、東松島の食材に関する知識がクイズ形式で出題されるもので、舛井ゼミはプログラミングを担当。地元の矢本第一中学校の生徒がクイズ画面のイラストを描いた。

同市主催のイベント「ひがしまつしま食べメッセ」（11月18日、東松島市コミュニティセンター）でお披露目とセレモニーが行われた。舛井准教授とアプリ開発のリーダーを務めた三浦聖也さん（経営2・宮城県石巻北高）がステージに上がり、渥美巖東松島市長らとともにくす玉を割り、配信を祝った。アプリ体験ブースには大人から子どもまで、多くの来場者が訪れ、楽しみながら〝食〟を学んだ。

三浦さんは「東松島市の方々の期待に応えようと努力してきた。製作したアプリが配信されるのは初めての経験で、ここまでたどり着くことができてうれしい。さらに改良を重ね、より良いアプリにしていきたい」と充実した表情で話した。

イベントには舛井ゼミが参加する高大産連携プロジェクト「Pepper社会貢献プログラム」も参加。2台のPepperが石巻市に関するクイズや調理クイズを出題し、来場者を楽しませた。

「食べメッセ」で健康チェック

山内武巳人間学部教授も「ひがしまつしま食べメッセ」でブースを出展。花王株式会社との共同研究「健康づくり活動を生かした地域づくり」の成果を展示し、健康チェックを行った。

健康診断の結果を説明する山内教授

内臓脂肪、動き年齢、握力の三つを測定し、健康状態を確認するもので、多くの来場者が足を止め、通常とは異なる健康診断を体験した。山内教授は「イベントは高齢者や子ども連れの方が多く、直接話を伺うことができ、勉強になった。今後も地道に研究を続け、地域に貢献できればと考えている」と話した。

外来魚で食品づくり

伊豆沼で野外実習

かまぼこの硬度を測定する学生たち

宮城県北部のラムサール条約登録湿地・伊豆沼で、理工学部食環境学科食品工学コースの野外実習が12月1、2日に実施され、3年次生8人が参加した。

伊豆沼は近年、特定外来生物のオオクチバスなどが増加し、生態系の単純化など環境問題が生じている。今回の実習は、外来魚を資源と捉え、地域の特産品にすることができないかを検証する本学ならではのユニークな取り組み。オオクチバスをかまぼこに加工し、味や硬度、食感などを調べた。

秋元直輝さん（宮城県多賀城高）が「においと硬さが気になった。材料や手順を変えてもあまり良い結果が得られず、商品開発の難しさを感じた」と話す一方、阿部浩之さん（秋田県角館高）は「泥臭いイメージのオオクチバスも、かまぼこに加工することで臭みは気にならなくなった。課題は多いが、実習で測ったデータをもとに商品化につながる研究を続けたい」と今後の取り組みに意欲を見せた。

研究室探訪 ―④―

基礎の理解が応用につながる

理工学部情報電子工学科
本田秀樹 教授

実験方法を説明する本田教授（中央）

専門は電力システム工学。電力システムを安定的かつ効率的に運用する方法を研究している。近年は自然条件の影響を受ける再生可能エネルギー電源の利用が進み、電力ネットワークの周波数および適正電圧の維持がより難しくなっている。また、電力小売り自由化、都市部への需要密集などから広域的な均一サービスの維持が困難になりつつあり、こういった課題の解決を目指している。

講義では電磁気学を担当している。クーロンの法則、電気と磁気の相互作用である電磁誘導、電磁波といった物理現象の解説はもとより、工学技術者として社会で活躍するために必要な直流、交流回路などの基礎知識の習得を念頭に、授業を展開している。

学生たちには基礎をしっかりと固め、幅広く、多くのことにチャレンジしてほしい。電磁気学の講義がそうであったように、決して難しい式を覚える必要はない。基礎を理解していればさまざまな場面で応用できる。これは全ての学問、社会生活に言えることである。

4年次生が就活体験談

就職活動本番を間近に控え、3年次生を対象としたさまざまな進路支援ガイダンスが行われている。11月22日には「先輩たちの就職活動体験談」が5号館で行われ、内定を得た4年次生35人が就職活動のノウハウを伝えた。

3年次生約150人が参加し、自己PRの方法や面接で聞かれたことなどを質問し、熱心にメモを取った。千葉美沙季さん（入間3・宮城県岩ケ崎高）は「インターンシップに参加したり、業界研究を進めたりしてきたが、先輩からのアドバイスを聞き、これからやらなければならないことが明確になった」と話した。

11月から開設されている就職資料室の相談コーナーでも同じく、就職活動を終えた4年次生から話を聞くことができる。4年次生8人が就活サポーターとしてアドバイスを送る。毎週月、火、水、金曜日の14～16時で、期間は1月31日まで。学部や希望する業界などに関係なく、先輩たちに質問し、不安を解消してほしい。

多くの3年次生が参加し、熱心に耳を傾けた

石巻専修大学は国際交流協定校の中国・温州大学と交換留学生の相互派遣などを行い、学生、教職員の交流を深めている。１年間の長期交換留学プログラムに参加し、今年３月から同大で学んでいる大友將弘さん（経営３・宮城県石巻西高）が現地での生活をリポートする。

中国の学生とディスカッションする大友さん

中国・温州大留学　大友さん（経営3）

日中の違いを考える

温州大学では中国語と経営戦略を主に学んでいます。中国語は教科書読解、リスニング、スピーキングはもちろん、教科書の中文和訳にも力を入れています。最近の授業では自分の故郷について紹介し、どう感じたかをディスカッションしています。

驚いたのは日本のアニメ、映画、テレビ番組、音楽などサブカルチャーや観光地に興味を持っている学生が多いこと。外国語として日本語を選択する学生は他の言語よりも多いです。なかには私よりも日本のアニメに詳しい人もいます。

現在は寮で他の外国人留学生たちと生活しています。近所の商店街を散策したり、地元の食を体験したり。中国の言語、文化、風土を学ぶことに時間を費やしていますが、同時に自国と比べて何が違うのか、なぜ違うのかを考えさせられます。日本の良いところ、悪いところを見つめ直す良い機会になっています。

中国で生活し、一番強く感じるのは現地の人たちの優しさ。機会があれば留学や短期研修などで、一度は中国を訪れてほしいと思います。